

ハワイに生きたある日系人の自叙伝 — HANA, DAYS OF MY YOUTH を通じて —

The autobiography of Japanese American In Hawaii.
— HANA DAYS OF MY Youth —

山 本 茂 美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

2018年夏、あるテレビ番組で「真珠湾攻撃はアメリカ政府には知られていた事実だった」、という検証をしていた。その番組の内容は今まで多くの文献を研究してきた中にはどこにも書かれていなかった。日本からひそかにハワイに入り真珠湾攻撃の準備をしていた日本人がいたという。しかし彼が日本と交信していた内容を傍受していたアメリカ軍は日本が攻撃してくることを知っていてアメリカ軍は日本から攻撃を仕掛けてくるのを待っていたというのである。その話が真実かどうかは多くの見解が分かれることだと思うが、強く感じたことは真珠湾攻撃のためにその後の人生を大きく変えられてしまった日系アメリカ人のことであった。以前ハワイの写真花嫁について映画や小説を通して研究をしたが、その時は真珠湾攻撃後のハワイの日系移民の生活について研究するには至っていなかった。

今回のテレビ番組を見た後、アメリカ史の多くの記録、特にハワイに関係する歴史、戦時中のハワイの日系新聞、さらにハワイに集団移民した伊達の記録を調べてみた。それまでにアメリカ本土の日系アメリカ人の歴史や

強制収容所での生活の記録、収容所で発刊された日系人向けの新聞など多くの資料を研究し、近年多く出版された日系文学の中に書かれている生活を史実と比較した研究を続けてきていた。

昨年には本土の日系アメリカ人として育った若者が親の意向で日本に戻り戦争に巻き込まれたがために日本の軍隊に配属された自叙伝を研究することで同じような悲劇の記録にたどりついた。^{註1}彼らは日本に残り進駐軍の通訳として日米の懸け橋になっていた。そこで今回ハワイの日系人たちは戦中戦後どのような生活をしてきたかをケネスTオカノの自叙伝中心に研究しようと考えている。

1 ハワイの日系アメリカ人の歴史

今回は日系アメリカ人の歴史の中で特にハワイの日系人の作品から第二次世界大戦前、さらに戦中、戦後の生活や人々の考えていたことを探るため改めてハワイでの日系人の歴史を調べてみた。

1806年、ハワイの島々を統一したカメハメハ大王の治世に、ベルセバランス号の船長がオアフ島で8人の日本人を発見している。この8人は太平洋の中で立ち往生していた帆船

から他の外国船に助けられオアフ島に置き去りにされた。彼らはその後故郷に戻されたという。さらに1806年に別の難破船がハワイに到着しやがて他の船に乗って日本に戻されたが、当時他の国から戻ることは罪人だったので一人は拷問に耐えられず自殺しもう一人は仏教の道に入り生涯をすごしたという記録がある。。その他多くの漂流者がハワイに入り多くは命を落としたが、1860年にアメリカ本土に向かった遣米使がハワイに立ち寄った折日本人に出会い通訳をしてもらったという記録もハワイの新聞に残されている。^{註2}

1860年にカメハメハ4世は、日本の幕府にハワイへの日本人労働者募集養成の書簡を送ったという。すでにアメリカ本土では日本人労働者が鉄道建設に従事していたからだという。しかし日本国内では藩同士の間で衝突が多くあり開港を求める通商条約をたずさえて米国総領事タウンゼント・ハリスが到着したこともあり、将軍は多くの問題を抱えていたので、カメハメハ王の要請に即答できなかったという。その後1865年3月10日には、ハワイの外務大臣R・C・ワイリーが、翌年の3月24日には、その後の継者であるチャールズ・ド・バリグニーが、横浜駐在のハワイの総領事ユージン・パン・リードに、日本人労働者の導入を急いで行うように書簡も送ったという。

やがて明治元年の1868年に149名の日本人がハワイに渡った。初めての官約移民である。ハワイの農業経営者たちは、「元年もの」と呼ばれたがハワイへの定着度は低かった。農業に不慣れなこともあったし、経営者と賃金や労働条件を巡って対立した結果ほとんどが農場を去ってしまった。その後1885年に日本からの移民が再開された。サトウキビ畑の労働力不足に悩むハワイと、失業者対策に頭を悩ます一方で、移民が郷里に送金する外貨の

獲得を望む日本政府の利害が一致したのだという。ハワイ政府が金を出し、日本政府が斡旋した移住者は「官約移民」と呼ばれた。その後、移住の斡旋は1894年から民間会社に委託され、移住者は「私的移民」と呼ばれるようになった。官民移民と私的移民は「契約移民」とも呼ばれ、労働者は農場主と契約を結び、渡航などに伴う諸経費を負担してもらい代わりに、3年間はその農場主に拘束されることになった。1900年に「契約移民」制度は廃止され、1908年まで「自由移民」の時代になった。

官約移民としてハワイへ渡った日本人は約2万9000人、その後、私約移民・自由移民として渡った数は約12万5000人と推測されている。その結果1880年初めには全サトウキビ労働者の1%未満だった日本人労働者の数は1902年には60%を超え1902年には70%に達したという。この日本人の移民のパーセンテージの大きさが本土の移民との戦中の処遇の違いを生み出したのだと考える。1908年以降は「紳士協定」ができたので日本からの移住は制限されるようになり、移民の家族や帰米者でなければ移住が認められなくなった。さらに1924年には排日移民法が制定され以降日本からの移民が不可能になった。この間19世紀末から20世紀前半までに約22万もの人々が日本からハワイに渡った記録が残っている。^{註3}

2 ハワイの日系人たちの生活

ここでハワイでの生活を記録したケネス・T・オカノの「あるハワイ移民の遺言」という本から当時の生活を調べていきたい。ケネス・T・オカノは、1927年、ハワイ・マウイ島最東端の孤立した町「ハナ」のプランテーションで生まれ、育った日系移民三世である。先にも述べたように日本からの本格的な移民

はハワイが最初で19世紀末から20世紀はじめにかけての移民最盛期、彼らの多くはサトウキビ農場で一定期間働く契約移民だった。その中のケネスの祖父フサキチ・オカノはこれにあきたらず、プランテーションとサトウキビの栽培契約に成功、1921年、6人の子供のうち3人を残して帰国したそうである。ケネスの父親コウイチは残された一人だったそうだ。^{注4}

コウイチはプランテーション技師として働きながら6人の子供をもうけた。ケネスはその中の二男だった。コウイチは機械、自動車、溶接、製糖プラント、重機、電気、発電、木工などもこなす一流の技師だった。さらに映写技師までやっていたという。小学校卒業後彼は独学で様々な技術を身につけていったという。ケネスはこの父親に大きな尊敬の念を持っていたという。プランテーションでは父の地位も上がり比較的大きな家に住んでいたという。本の中ではプランテーションの中の生活を細かく記述している。ご飯をくどにまきをくべて炊いたり、反面パン屋さんを開く友人たちの話、レストランでの食事など本土の日系人社会とは少し違う生活が描かれていた。男の子も女の子も、13歳になるとプランテーションで番号をもらいサトウキビ農場で夏アルバイトができるようになった。草かきでまだ若いサトウキビの畝に沿って雑草を書き取ったりのびた草をカマで刈るという仕事をして100フィートごとに賃金が支払われたそうである。比較的豊かな家庭とはいえ、プランテーションでの生活はおいしいものを満足のいくほど食べられるものではなかった。おこづかいをもらっておいしいものを食べたりネズミを駆除して映画館のクーポンをもらい映画に出かけたりしたという。妻たちはプランテーションの独身の外国人の生活を助けるために洗濯などをして生活費の足しにした

という。プランテーションでの生活は厳しくどの移民の家庭も、口では言えないような辛いことがたくさんあったと彼は回想している。プランテーションの仕事以外にケネスの父はハナ劇場の映写技師をやっていたこともあったという。もちろん様々な歴史書の中に移民たちの厳しい生活が書かれている。しかしケネスの回想を読み進める時、本土の日系人ほどの差別を感じない。ここに本土とはハワイとの違いがあるのだろう。ハワイの人口における日系人の比がそうさせていたのかもしれない。

ケネスの家は一世の典型的なものだが、寝室にごごを敷き、ふとんで寝ている家が多かった中でケネスの家には畳もごごもなく床にベッドを置いて寝ていたという。前述のようにご飯はかまで炊きおかずやみそスープは石油ストーブで作ったと紹介されている。日系人はアメリカに渡っても日本文化を守りその様子が異様にみられ、差別される原因になったといわれているがハワイの生活でも同じような生活であったことがわかる。しかしハナという地域では田舎であったこともあってそこまでの反日感情は経験していなかったようである。

行事としてはハロウィーンにはパイパイヤを採ってきてジャック・オー・ランタンを作り下から釘を打ちろうそくを立てた。ハロウィーン当日にはベランダにランタンを飾った。さらにクリスマスにはノーフォークパインの木に緑や赤のテープを飾りクリスマスツリーを飾った。ささやかなお祝いではあったがこれはアメリカ文化のなかで暮していたケネスたちの生活をみることができる。^{注5}

反面新年には近くの家みんなが集まり食事をしたという。おせちはなかったようだが食事の後は爆竹をならしてみんなで楽しんだという記述がある。このようにハワイの日系

人も本土の日系人同様に日米の文化を忘れることなく継承していたことを伝えている。また本土では記述がない「タノモシ」という制度を作っていた。なかなか日系人にまとまったお金を貸してもらうことができなかったので信頼できる仲間を10人から15人集め話し合いで掛け金を決め、毎月ツポに掛け金を入れる。講元は最初の月に集まった掛け金を借りられた。利子は払わなくてもいいがお金の管理はしっかりなされた。こうして参加者全員がお金を借り終えたらタノモシを終了したという。このような日本式金融制度を利用してケネスの兄弟はラハイナルナ高校に行けたという。

1930年半ば、日本が中国と戦争をしているときにはセンニンバリを作って日本の戦争遂行に協力を要請され地域の女性たちは、日本に多くのセンニンバリが船で届けられた。このセンニンバリは日系二世の若者たちが米軍兵士としてヨーロッパ戦線に行ったときにも作って持たせたということである。これは今まで自分が読んできた作品に書かれていなかった。様々な作者による作品が今までの日系移民の生活や心情を伝えてくれる。

3 ハワイでの日系人の教育について

ケネスが暮していたハナにはハナスクールという8年制の正規学校があった。授業はすべて英語で行われた。マウイ島の中でもカフルイから60マイルも離れていてマウイの教育委員会の人たちも田舎者扱いしていたとケネスは回顧する。毎年夏休みが近づくとハナスクールの先生がガーデニングの授業をとっている生徒に農業実習として、低学年校舎と道路の間の菜園に野菜を植えさせた野菜は夏休みの間に生徒が収穫し、ニンジン、キャベツ、ピーツ、豆、トマトなどを一輪車に積んで町の人たちに売ったという記載もある。

本土の日系人の生活と違うのはマウイ島であることも大きな要因ではあろうが、プランテーション中心に生活を築いていたのでどこかさも感じられるのかもしれない。このような地元の学校だけでなく本土同様に日本語学校もあったという。

日系人生徒は月曜から金曜日まで放課後、土曜日は午前中日本語学校に行き、日本語の授業を1時間受けなければならなかった。日本語学校は、低学年と高学年があった。日本式の号令や日本式のあいさつ整列など多くの日本文化を指導していたようである。卒業式には日本語の「仰げば尊し」や「蛍の光」を歌ったという。しかしこの学校も1941年の真珠湾攻撃以降は閉講され、校長先生は日本国籍を所有していたこともあり本土の強制収容に引っ張られた。しかし本土の若者が多く強制収容された中でハワイの日系人はほとんど強制収容所に入れられていない。これはハワイには多くの日系移民がいて生活を支えていたので収容収容されるとハワイの社会が立ちいなくなるからだったようだ。

1941年8月に「秋学期から新入生として受け入れる」との通知を受け取りラハイナルナ高校に入学したケネスは12月7日、太平洋戦争が始まった時、ラハイナルナ高校の1年だった。彼は1945年6月に卒業するまで4年間寄宿舎で過ごした。その間ハナに戻らなかったため家族や友人たちがどのように戦争を受け止めていたかわからないと述べている。それほど彼にとっては深刻な被害を受けていなかったということなのかもしれない。それでも後にハナホンガンジ教会などの日本教会の牧師や、要注意人物がFBIに連行され本土に強制収容所に入れられ教会が閉鎖され宗教的なことは行われなくなったことを知ったという。

このように学校は戦争中も続けられていた

が、若い男性教員は多くが軍に志願したり召集され学校を去り、女性教員が代わりを務めた。これは日本の学校現場でも同じことが起きていた。開戦とそれ以外は今までのように海に釣りに行ったりピクニックに行ったり、本土の日系人はアメリカ国籍を持ちながら強制収容所に送られたのとは対照的な生活をしている様子が描かれている。しかし学校は軍のための病院になったり日本仏教寺院の境内にあった木造建物が学校のキャンパスに移築されたり、寄宿舎が死体公示所になり間仕切りのない体育館で寝泊まりするようになったという。少しずつ戦争を実感していく様子が描かれている。また金曜日の午後の授業は打ち切れ軍に人手をとられたサトウキビ農場やパイナップル農場で生徒たちは働き寄宿制は学校農場で働いたという。

血液型と自宅住所などを記した身分証明書ガスマスクが全員に配給され常に携帯しなければならなかったし、日本軍の空襲に備えて消火訓練や避難訓練もたびたびおこなわれたという。このような事態は日本でもおきていたが本土の日系人がみな強制収容所に入れられ、人間としての生活を奪われたことを考えればかなり待遇が違うことが明らかになっている。ガソリンが配給になり町と寄宿舎を往来するバスやタクシーを使えなくなり夜間外出禁止令も出されたが、日中は外出できクラスのダンスパーティーも何度か開かれたという。もちろんケネスたちをジャップと呼ぶこともあったという。しかし彼はこのようなことに対してはつきり嫌だと述べている。

「なぜなら私たちは日系人であって日本人ではなくアメリカ市民だからだ。」^{註6}

この強い信念で多くの日系人が助けられてきたのだと考えている。

ケネスは、1942年の夏休み、サトウキビ畑でアルバイトをするためにハナに戻った。2

年生になった時の小遣いを稼ぐ目的だったがサトウキビの収穫は汗まみれで重労働だったという。彼は戻ったことを後悔して1943、44年にはハナには帰らず学校の芝生の手入れ、スプリンクラーの操作、生け垣の刈込、落ち葉集めなど、キャンパス整備のアルバイトをした。肉体労働を避ける姿に一世たちの日系人のイメージは少しもみられない。彼はアメリカ市民としての権利をしっかりと守りながら生活していたのだろう。そのため彼の自叙伝は全体的に明るい側面を多く伝えている。

ここに当時のオアフ島での一つの事件を紹介したい。真珠湾攻撃に参加した戦闘機の中に、米軍の応戦で被爆、オアフ島北西のニイハウ等に不時着したゼロ戦があった。島民のほとんどがカナダ系のネイティブハワイアンで日系人は2家族しかいなかった。不時着したゼロ戦を囲み処分を話し合っていた時、日系人のハラダが駆けつけて島民を説得して自宅で面倒を見ていた。5日後島民が多数押しかけこの日本人は虐殺された。もはやこれまでと覚悟したこの日系人は家に火をつけピストルで自決した。^{註7}このことでアメリカ人は大きな衝撃を与えられた。日系人でもアメリカ人であった二世が命をかけて日本人を助けようとしたのだから、日本育ちで天皇に対する忠誠心が強い一世は何をするかわからない。日本人は恐ろしいというイメージを与えてしまった。負傷した兵士を救おうとする行為は法的にも認められていた。捕虜の保護はジュネーブ協定にも規定されていた。それにもかかわらず日系人全体に対して間違っただイメージを持ってしまったことが本土を含む日系人の生活に深くらい影を落としたことは残念だと感じる。

4 日系人としての日本人との出会い

1945年にハナプランテーションは閉鎖され

牧場に移行した。プランテーションにいた日系人は他の島に転居したり会社やプラントに変わった。ケネスは高校卒業後プランテーションの修理工場で機械助手の仕事をしていた。プランテーション閉鎖後父親とともに砂糖プランテーションで働けることになったという。しかし1946年にはマウイ全体の砂糖産業を巻き込む大きなストライキが起り、将来に希望を持てなくなったケネスはワイルクの徴兵委員会に行き、兵役の種類と期間、派遣先、特典を調べ兵役に就いた分だけ無料で教育を受けられることなどを知った。そこで彼は通信部隊で3年兵役に就くことを決めた。通信部には将来性があると考えたからだという。1946年9月16日、ケネスは軍隊に正式登録をしてホノルルに渡った。本土の日系人は忠誠を示すために多くが軍隊に入ったが、戦後軍隊に入るというこの行為は今までに記述された本を見なかったのが意外だった。

ケネスはホノルルに着くと、トラックで第13交替要員訓練基地に運ばれ、そこで13週間新兵として基礎訓練を受けた。訓練の終了後日本行の命令と30日間の休暇が与えられた。日系人は子供のころに日本人学校に通っていたので日本語の通訳として貴重だったようである。昨年は日本に戻っている間に太平洋戦争になり日本国籍も持っていたために日本軍に徴兵され特攻隊になった日系人の自叙伝を研究した。幸い飛び立つ前に戦争は終わり進駐軍が日本に入った時、英語を話せるこの日系人は大変手厚くされやがては日本とアメリカの英語教育の懸け橋になった。ケネスはその反対の立場で日本に上陸したのである。

キャンプザマに着くと手続後軍服が支給され東京丸の内の連合翻訳・通訳部が入っているビルに連れて行かれた。彼は他の日系二世とともに連合軍翻訳、通信部に配属されGHQが運営する日本語学校で特訓を受けた。一

日8時間軍事用語を中心に猛特訓を受けたあと、東大や明治大学で習った日本語が通用するかを試してみた。特訓を数ヶ月受けた後、毎回のテストにも合格していかなければ仕事には就けなかった。訓練の合間には東条の極東裁判も傍聴した。日本語能力トップクラスの二世たちが見事な通訳をしていたと書かれている。当時はまだ空襲から間がなく東京は2000トンの焼夷弾の直撃を受け焼け野原だった。日本語特訓終了後、何人かの兵士が第一騎兵師団軍政部の手伝いを命じられ横須賀に派遣された。ここで戦後初の総選挙が行われた。ジープで投票所を周り投票がルール通り投票が行われたか監視した。日本占領軍の総司令官マッカーサーは彼らに投票権は民主主義の基本原則だと唱えていたという。^{註8}

手伝いを終えて正式に任務したのは北海道だった。大441Cの中の稚内分遣隊に派遣されたが、そこは軍政部と市町村の連絡役を兼ねていた。1948年には北海道から選ばれて東京で再び訓練を受けた。日本との多くの連絡にさらに正しい日本語が必要になったということだろう。この後ケネスは30日の休暇を取って親戚を訪ねている。彼の生活の中で祖父や母の母国との関係はあまり書かれていなかったが多くの日系人と同様に故郷を訪れると今までにはなかった思いがあらわれるようである。

広島駅はひどく焼き焦げていて、何日かけて親戚の家を訪れる中で彼は原爆の悲惨さを目の当たりにする。彼の言葉は印象的だった。

「なぜ広島は原爆投下の第一目標にされたのだろう。広島は西日本と南太平洋に兵隊や物資を供給する基地だった。戦争に協力する工場もたくさんあったという。しかし広島が選ばれたのは軍事都市だったからというのは本当だろうか。

アメリカ政府や軍の指導者は原爆が軍事施設ばかりではなく、市民にも甚大な被害をもたらすことを考えたことはなかったのだろうか。』^{註9}

無条件降伏という言葉を受け入れるのも時間の問題だった日本に広島に原爆を落とす必要はなかった。長崎への原爆投下はなおさら必要なかった。という疑問を抱いたという。日系人といえどもアメリカ軍の兵士のこのような感想は貴重なものだと思う。

1949年夏ケネスは帰国する。その間に親しくなった多くの人たちに別れを告げて帰国の途に就いた。多くの思い出を作り彼はハワイへ帰還した。この多くの思い出は戦後の日米関係の修復の懸け橋になったことを確信している。7月28日2年10か月10日に軍役を果たし、除隊した。家に帰った後家族と日本語で話し英語が得意でない母を喜ばせ、また広島の原因の惨状をとめどなく話したという。

日本での兵役の特典として34か月教育を無料で受けられることになり、彼はいろいろ考えた結果本土のブラドレイ大学に入学した。大学はイリノイ州のベオリアにあった。新入生は入寮する決まりだったそうだが、彼は大学内の復員軍人用住宅に入れたという。大学には1950年から1954年まで在籍し、1953年に工業技術教育で学士号1954年に工業教育で修士号を取得した。復員兵米兵援護法で授業料や教科書代は免除のうえ毎月手当として150ドル支給されていたので多少のアルバイトをしながら学業を続けたという。日本への兵隊としての3年余りの月日はケネスに祖国を知ることとともに自分の教育にも大きな助けになっていった。

大学卒業後ホノルルのイオラニ学園の教師になり、さらにスーパーインテンデントになったケネスは6人の部下を持つ学園管理者の一員になった。イオラニ学園は幼稚園から

高校まである私立高校だったそうだ。この学校の施設メンテナンス要員の中に小柄な1世老人がいた。彼はヤードマンとしても雇われていた。無口な人物だったがケネスが日本語を話せる日系人ということや日本にいたことなどの世間話をするうちに自分の過去を語り始めたという。以下は彼が語った話である。

1885年1月15日、長野県カミタカイ郡に生まれたハジメカタヤマは21歳の時横浜から香港丸に乗って単身ハワイに渡り同郷の移民たちとともにワイパフのオアフ・シュガー・カンパニーで働き始めた。辛い重労働を農場でした後、彼はオアフ島ワヒアワにあったカリフォルニア・パッキング社のパイナップル農場に変わった。モロカイ島農場に移り住んで仕事をし1924年に広島出身のイキヨ・フクイと結婚した。その後通算18年近く同社で働いてやめた。1926年ごろハジメ夫婦はオアフ島で「オカズヤ」という小さな惣菜店を開いたが1930年協議離婚した。1932年当時ヌウアメにあったイオラニ学園にヤードマンとして雇われ27年働いた。^{註10} 彼は学園の敷地内の用務員住宅に住みキャンパスの手入れをしてきた。

1959年、75歳の時に退職したがそのままキャンパスに住み続けた。長年世話になったことへの学園の特別な配慮だったという。年をとった彼を心配してキャンパスの人たちが世話のために出入りしたという。しかしやがて肺結核になり入院することになった。入院費は学園が負担して医療費は保険でまかなわれた。日本には身寄りはないという彼は、亡くなる4年前に大好きな学園の近くに自分の墓を購入した。墓石には名前と出身地住所が彫られていた。1976年2月身内の誰にも知られず亡くなった。葬儀の時ハワイ信託銀行の行員が遺言をあげ読み上げた。その内容はこのようなものだった。

「全財産の40%をイオラニ学園に、同40%をクアヒキ医療センターに遺贈する。残りを入院費と葬儀代を支払い余りは世話になった人で分けてほしい。」

遺産総額は9万ドル余りだったという。周りの人たちをその額にショックを受けたという。月収300ドル足らずの彼が貯めた額としては驚異的だった。この遺言により学園は『ハジメ・カタヤマ奨学金』を創設し、経済的に苦しい全面的に援助が必要な新入生9年生に与えられた。ケネスはこの信託受任者になり彼の素晴らしい遺産を後世に伝えることになったという。同様に遺贈されたクアヒキ医療センターも正面ホール左手にメモリアルルームを設置した。正面ホールの左手の壁面に彼の名前が彫られた銘板が埋め込まれているという。

多くの差別に耐え貧しい生活にもくじけることなくただ真面目に生き抜いた日系一世が多くの人から称賛されたことは多くの日系人にとってどれほど誇りになっただろうか。多くの苦難の歴史を追ってきただけに本当に素晴らしい出来事を知った。

おわりに

昨年の日本軍に入って特攻隊になった日系人の生涯に続いてハワイでの日系人の当時の生活との比較をしたいと思い今回ケネス・T・オカノの自叙伝を中心にハワイの日系人と本土の日系人の生活を読み進めた。彼の生活は決して裕福ではなかったが本土の日系人のように財産をすべて奪われ砂漠の馬小屋に収容された悲惨な生活は見られなかった。アメリカ人としての誇りを持って生きてきたハワイの日系人たちの歩みはアメリカ合衆国の日系人への見方を変えてくれたと思う。しかし軍隊に入り日本の土を踏んだ後ケネスの物

の見方が他の日本を訪れたことのある日系人のように変わったことに、理屈では説明できない血のつながりを深く考えさせられた。日本に行き一世たちの故郷に触れたから、彼はハジメの遺言を守り誇りを持って奨学生たちにハジメの生き方を紹介しながら生きていけるのだと思う。苦難に愚痴ひとつ言わず黙々と働いた彼の大切なお金を誇りを持って守っているのだろう。多くの歴史を一冊の本から知ることができた。

今後さらにケネスのような自叙伝を探してさらに比較研究していきたい。

注

- 1 筆者は昨年日本軍の兵士としてアメリカ軍と戦う運命になった日系アメリカ人の研究をした。
- 2 ハワイの日本語新聞雑誌辞典より
- 3 バッツィ・スミエ・サイキ、「ハワイの日系女性」pp4-9
- 4 矢口祐人、ハワイの歴史と文化、pp22-26
- 5 ケネス・T・オカノ、「あるハワイ移民の遺言」、p3
- 6 ケネス・T・オカノ、p15
- 7 ケネス・T・オカノ、p92
- 8 ケネス・T・オカノ、p202
- 9 ケネス・T・オカノ、p106
- 10 ケネス・T・オカノ、p115
- 11 ケネス・T・オカノ、139

Work Cited

- 1 ケネス・T・オカノ、片山久志、「あるハワイ移民の遺言」、川辺書林、2005年、長野
- 2 矢口祐人、「ハワイの歴史と文化」、中公新書、2002、東京
- 3 中込真澄、「ハワイを拓いた日本人」、幻冬舎、2016、東京
- 4 バッツィ・スミエ・サイキ、「ハワイの日系女性」、秀英書房、1995、東京

Works Consulted

- 1 植木照代ほか, 「日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む」, 創元社, 1997年, 東京
- 2 ジョン・オカダ, 中山容訳: 「ノーノーボーイ」, 東京, 1981
Danieru.k.Inoue, Journey To Washington, 1967, Sairyuusya, Tokyo.
- 3 海沢富 (トミ・カイザワ・ネイフラー), ,Our House Divided, University of Hawai Press, 1991, Hawaii.
- 4 猿谷要; アメリカ史重要人物101, 新書館, 1997年, 東京。
- 5 武智鎮典, 「442部隊の真実」, ポプラ社, 2012年, 東京。
- 6 前山陸; ハワイの辛抱人, お茶の水書房, 東京, 1986。
- 7 西山千, 「真珠湾と日本人」, サイマル出版, 1991年, 東京。
- 8 山本茂美, ダニエル・イノウエの生涯—日系アメリカ人最初の上院議員の光と影—, AIT愛知工業大学研究報告, 48号, Vol48, 2013.
- 9 柳田由紀子, 「二世兵士 激戦の記録」, 新潮新書, 2012年, 東京。
- 10 門池啓史, 日本軍兵士になったアメリカ人たち, 元就出版, 2010, 東京。
- 11 Shigeo Imamura, The Story of an American Kamikaze, American Literary Press, Inc.